

## 中小企業金融における銀行と借手の情報格差について —担保と貸出金利の相関性に関する検証—

みずほコーポレート銀行 小林 俊之

中小企業金融では、資金の貸し手である銀行と資金の借り手である中小企業の間、借手手の私的情報に関して格差があるといわれる。すなわち、銀行は中小企業である借手手の信用力や事業継続性に関する正確な情報を入手することが難しく、このような情報格差を埋めるためにリレーションシップバンキングの強化が有効であるとされる。銀行と借手手のこのような情報格差の存在は間接金融の研究においては普遍的な前提となっており、特に、借手手が中小企業の場合には情報の非対称性の度合いが大企業向け貸出よりも大きいとみられている。

ところで、中小企業金融における銀行と借手手の間の情報格差はどの程度深刻な問題なのだろうか。銀行の貸出資産の健全性が叫ばれている今日において、銀行が借手手の信用力を全く把握せず、許容できるリスクかどうかを判断しないままに貸出を実行するということは考えにくい。銀行は借手手が中小企業であっても、借手手の返済確率をある程度予測し、貸出金利の設定や担保の必要性を判断しているのではないか。そうであれば、中小企業金融に関する研究についても、情報格差が大きいという前提は見直される必要があるかもしれない。

このような問題意識から、本論文では中小企業金融における銀行と借手手の情報格差の程度を検証する。すなわち、銀行の担保取得行動と貸出金利の連関性を検証することによって、銀行の担保取得動機が、「逆選択回避型」なのか、「貸し倒れリスク回避型」なのかを類推する。担保と貸出金利が代替的であれば逆選択回避型、同調的であれば貸し倒れリスク回避型である。さらに、逆選択回避型であれば、銀行と借手手の間には事前情報の非対称性があり、銀行は借手手の信用力を正確には評価できないということが推測され、一方、貸し倒れリスク回避型であれば、銀行と借手手の間における事前情報の非対称性はそれほど大きくはなく、銀行はある程度借手手の信用力を事前に評価できるということが推測される。

以上